

# ホトトギス

四月号

ホトトギス

昭和二十三年三月二十八日運輸省特別郵便承認第六二七号  
平成二十二年四月一日発行 第百十四卷第四号



## 俳句随想 〔三百四十六〕

汀子

季題についての質問が後を絶たない。特に歳時記の説明を浅く解釈して、一字一句歳時記に載った表現を使わなければならないと思っっている人がかなりいるようである。

今回の質問は「春の夜」という季題について、首題のルビに「はるのよ」とあるから、「はるのよる」と読んではいけない。従って下五に「春の夜」と置かれた俳句は字足らずである。と或る総合俳誌の添削氏が言っており、添削氏は下五に「春の夜」とある句は「春の宵」と変えるようすすめているが、どう思うかという質問である。質問氏は会員にそう聞かれたので返事をしなければならぬというのである。

何という狭い考え方であろうかと思う。「春の夜」は正しい日本語である「はるのよる」と読めばよいに決まっているではないか。

歳時記の例句として下五に「春の夜」と置かれている俳句は「はるのよる」と読んでよろしいという意味を込めて例句が載っているのである。

「春の夜」を「春の宵」に変えるなんてとんでもない。

旬日記 汀子

平成二十二年四月一日 清交社

エープリルフルの雨の上りけり  
雨に香を閉ざすことなく沈丁花  
口中に桜の香りゆく干菓子  
みよし野の亀鳴く旅のとこのへり  
南朝の軸を与る花の雨  
歳間はば九十五歳亀鳴ける  
四月三日 菅屋ホトギス会

いくたびも霜の別れと思ひけり  
動くもの殆ど蛸とありしかな  
臘夜の虚実問はるることなる  
四月三日 悼 岩垣子鹿篠  
散る花を惜みをしみて余りある  
四月四日 下萌句会

悲しみの弥生の空に現れしもの  
悼みつつ旅の一人を消す弥生  
花辛夷 咲く坂道を偲ぶのみ  
四月五日 ロイヤル俳壇

臘夜の受話器置きたるそぞろかな  
こつそりて渡されてゐて桜餅  
雨つつくミモザの花の命はも  
悲しみは花のはかなさにも及ぶ  
散るほかはなし命とは桜とは

君在さば君在さばとて今日虚子忌  
魂歸りたまへ桜の忌日来し  
限りある命と知つてゐる虚子忌  
四月九日 工業倶楽部

日帰りの旅のやりくり春の昼  
見慣れたる景色なれども初桜

一人には一人の時間春の昼  
四月十日 くつろぎ吉野山

杉林花の明るさ見つつ抜け  
みよし野の桜の精となられしや  
四五片を散らしてはなき吉野山  
みよし野の花の思ひ出繻かん  
勿体なし命も花の一片も

花の闇よりすぐ宿の灯に返す  
みよし野の夜の怪臘々にて  
花の闇深し宿の灯届かねば  
むささびの飛ひしと臘夜の山路  
山の冷纏ひ臘の星を見に

早発ちの人に届きし花の訃も  
花の宿噂をすれば現れし  
朝寝などする人のなし吉野山  
一片の落花に重ね偲ばるる  
誰が化身かや現はなれためのもの

四月十三日 大阪倶楽部  
人生を全うしたる臘かな  
みよし野の初桜とはもういへぬ  
快晴の吉野のさくら散りせめし  
咲き過ぎて出処正しきチュリップ  
旅先に届きし臘夜の訃報

四月十三日 綿業倶楽部  
みよし野の夜を招かるる春の星  
峽宿の星見ゆれば返す峽の宿  
遺言は感謝ばかりと聞く臘

四月二十日 有恒倶楽部

春の星 暁闇に雲消えてをり  
きざはしものを登れば出遇ふ春の星  
咲くもの庭の彩り百千鳥  
眺けてゆく庭に忽ち百千鳥  
四月二十日 無名会

みよし野の今年の花見終りけり  
花を見て仕事忘れてをりにけり  
道々の花見つつ来る花見かな  
終止符を打つ雨とつづく花見かな  
吉野山より尚つづく花見かな  
みよし野の奥の花見となりしこと  
模様 替したしと思ふ春灯

四月二十一日 夏潮句会  
予定なりとありてなかりし朝寝かな  
上京の予定に朝寝加はらず  
朝寝して朝風呂正座五分間  
一斉に咲き競ふ春惜む日かな  
牡丹の香り集まるところかな  
行春の庭に咲き継ぐものありて

四月二十二日 きざらぎ句会  
麗らかな昨日忘れてしまふ雨  
うららかな旅の心を切替ふる  
終の花さへも散らしてしまふ雨  
ふり返るとき遠ざかる花吉野  
誰彼を悼みて雨の春の昼  
うららかな心に偲ぶばかりかな

四月二十日 時雨会  
雨がちに雨がちに昏れライラック  
誰彼の旅の思ひ出ライラック  
降り出してのどかな雨ともういへず  
四月二十四日 句会と講演の会

花の旅 終りしよりの花暦  
一天をとり戻したる春惜む  
杉の花さへも飛ばざる不順かな

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年四月一日 蕉心会

エープリルフルであつて欲しきこと  
花屑のまだ一ひらも無き歩道  
人の世を隔てて蝌蚪の奔けり  
さう言へば昨日寝てへん句座うら  
船うらら 戦艦大和生みし 国  
うららかや天台烏葉供華として  
エープリルフルの句座に君は居ず  
うららかや座つた席で披講子に

四月二日 カトリック新聞選者吟

春灯に 聖書の 文字華やげり

四月三日 日本伝統俳句協会茨城県支部

朝光に解き初めたる桜かな  
花の宴 聖土曜日 の 落着きに  
花嫁のブーケめく朝桜かな  
花見酒 電気ブランといふ紳士  
日を浴びて余白埋めゆく朝桜

四月五日 四月三日岩垣子鹿様御逝去

万愚節過ぎたといふにこの報せ

四月五日 はせを句会

朝桜 一枝震へてより開く  
這ふものに翔ぶものに花ほほゑめり  
亀鳴けり 訃報とは唐突に来る

四月七日 土筆会

西に訃の続き日永の一卜日旅  
梨の花棚を歪めてをりにけり  
主婦といふ柳を身近に遅日かな  
思ひ出は尽きず遅日の別れかな  
四月八日 虚子忌

忌日 寺弘子子鹿と囀れり

四月十一日 吉野くつろぎの旅

一片が蝶となりゆくまでの黙  
なんぼでも出来る吉野の花見れば  
一卜年の句碑の歳月花万朶  
如意輪寺より花人となりゆく歩  
星二つ加へ吉野の花暮るる

四月十一日 野分会片屋例会

春潮に虚子の声聞く由比ヶ浜  
爪先に未来を秘めし仔馬かな  
春潮の寄せて古里香りくる  
人見る目親を見る目を持つ仔馬

四月十一日 過会

故郷の花に帰心を失へり  
花の句座八人の美女侍らせて

四月十二日 朝日カルチャー若草句会

呟いて浅蜷は夜を司る  
春の星残し吉野の朝ぼらけ  
逝きし人帰りに来る人春の星  
潤む目に春の星とは三つほど

四月十七、十八日 登高会百回記念小讀 高峰高原吟行会

白銀も春蘭の色として  
虚子の秘話流すが如く芹の水  
春雪を踏みしめ虚子の散歩道  
虚子の世の語部として犬ふぐり  
雪解水山の交響詩を奏で

囀の稜線滑り来る早さ  
雪解風富士を浮べてをりにけり  
四月二十日 草木瓜会

たましひを目覚めさせたる春の草  
春愁を見下してゐる星一つ  
醜草も名草も芳しき稲城

春愁を捨てるこの日にこの草に  
春愁をポケットに詰め込んでをり

四月二十一日 銀座和塾

春愁を納めてよりの旅立に  
亀鳴くや婚活中のあなたにも  
桜餅葉を食べる人食べぬ人  
春愁や黄身崩れたる目玉焼

四月二十四日 ホトギス社句会

蛤の粹に煮上る老舗かな  
神杉の花千年の色湛へ

四月二十五日 野分会東京例会

由比ヶ浜春潮悲史を乗せて退く  
仔馬生れ空と存問始まれり  
十勝野を知り尽したる孕馬

四月二十七日 若水句会

花重く重く人吸ひ込んでをり  
観潮船水尾渦潮に和してをり  
みよし野の花の精又一人増え  
落花舞ふみよし野の大舞台かな  
朝寝して大海原を一人占め

四月二十八日 目黒学園句会

春惜み人を悼みて籠る日々  
日の本に八十八夜てふ騒ぎ  
共に花見し悌を花に置く  
地に還ることを拒みし落花かな

# 雑詠

## 廣太郎 選

大根の葉のおいしさうなるを買ふ  
 ポインセチア買ひて聖夜に近づきし  
 窓に冬日粲窓を磨かねば  
 大根と水と清々しく出合ふ  
 冬の星分けて一番列車来る  
 手袋の指の優しく脱がれあり  
 西鶴に遇はむ浪花を着ぶぐれり  
 しぐれ忌を浪花の雨に濡れながら  
 新世界まづは串カツ温め酒  
 象の鼻濁る冬日に伸びて来る  
 向かひ風追風落葉日を返し  
 稿積みて十一月の喫茶店  
 うそ寒といふは心の隙間とも  
 地獄なす奈落を覗きゐる小蟻  
 杞陽師を語るわが師と萩の雨  
 朝露を川中島に踏みしだく  
 大本営跡の地下壕露けしや  
 胡桃割る信濃の人は話好き

熱海 嶋田摩耶子

同

同

渋川 山本素竹

同

神戸 山西商平

同

同

同

同

同

福山 竹下陶子

同

同

東京 大久保白村

同

同

名園の全てが雨に冬ざるる  
 初霜につつぱつてゐる鉄の橋  
 鳥も木も園も師走に無頓着  
 にはかなる風の吹き消す鴨の陣  
 余呉を打つ風のまにまに浮寝鳥  
 暮れてゆく湖面を切つて鴨の声  
 まなじりに流るゝ鴨の水辺あり  
 昭和はや遠しと詠ふ人の秋  
 落鮎の川をつめたさ言ひて佇つ  
 冬日はや退りし庭の水の音  
 又一人来ては去りゆく庭寒し  
 深山へと熊追ひ返す謀  
 焚火して人の輪山の木霊の輪  
 茶白山へ冬蝶ひとつ還りゆく  
 暦売立てば月日の走り出す  
 北窓を塞ぎ星座を置き去りに  
 黄落や光まみれの御堂筋  
 切り替へてまた切り替へて処す師走  
 ここのみな些事となりゆく日向ぼこ  
 短日のめがね探してゐるばかり  
 初雪やむかし残れる今出川  
 舞ふといふ事を知らずに朴落葉  
 昨日より空を広げて朴落葉  
 数へ日の短針はあと五周半

同 橋本くに彦

同

龍ヶ崎 今橋真理子

同

同

たつの 浅井青陽子

同

同

京都 安原 葉

同

同

神戸 長山あや

同

同

宝塚 水田むつみ

同

同

箕面 井上浩一郎

同

同

神戸 涌羅由美

同

同

# 雑詠句評（三月号より）

眞理子・千鶴子・憲明

芳子・静龍・とほ歩

むつみ・美奇・中正

葉保佳・廣太郎

## まためぐり来し露寒の被災の日 京都 安原 葉

「まためぐり来し」という導入部分は作者にとつての忘れ難い日を予感させ、「露寒」は晩秋のただならぬ寒さを物語る。「被災の日」へと淡々と詠み下されているが、それだけにその重さが読み手にはせつせつと伝わってくる。どんなに言葉を尽しても、この句の中の「露寒」にとつて代る表現はないだろう。「季節に語らせる」ということこの力をしじみと知る一句である。（眞理子）

作者も以前大震災の被災者として大変な思いをされた方である。丁度その頃は「露寒」の時期であった。毎年この時期になると、やはり同じような季節感があり、どうしても辛い思い出として蘇ってきてしまうのであろう。そんな心持でしっかり季節を捉え

ている作者なのである。（廣太郎）

## つちくれがはじけラガーとなりけり 神戸 藤井啓子

ラガーとはラグビーの選手のことだとばかり思っていた。歳時記の例句を見ても、そういう句が多い。ところが『広辞苑』を引くと、ラガーとはラグビーの俗称、選手はラガーマンというらしい。いずれにしてもこの句は私にはわからない。ただあのラグビーの激しいスクラムとか泥だらけになって闘う選手の様子とかを思い浮かべると、「つちくれがはじけ」という表現が感じとしては理解出来るのだが、具体的には景として目に浮かばない。（千鶴子）

筆者自身はラグビーをしないが、周りには実際ラグビー選手であったり、ファンであったりする人が何故か多い。ルールもよく知らないが、子供の頃、学生時代にラグビーの選手であった父親にもラグビー観戦に連れて行ってもらった記憶もある。一瞬を切り取った迫力が見て取れる句である。（廣太郎）（以下略）

# 天地有情

# 江戸選

砂浜に秋思の歩幅ありにけり 京都 稲畑廣太郎  
稜線を啄木鳥丸く仕上げゆく 同  
俳諧の月たとへ野に果つるとも 東京 岩岡中正  
夕鴨のよべばこたへるところまで 同  
秋惜みつつ遙々と来し旅路 樺原 安原 葉  
われ一人では勿体なき星月夜 同  
夫の忌も過ぎてたちまち十二月 東京 今井千鶴子  
ひとり居に馴れるといふは寒きこと 同  
暮れきつてからも洗へる大根かな 金沢 三村純也  
老いにけらしな葛湯にも舌を焼き 同  
戯画ながら兎に弓を引かすとは 神戸 後藤比奈夫  
狐ゐるところが妖しかりし戯画 同  
水亭の萩刈り始む夕まけて 吹田 浅井青陽子  
花言葉無きはかなしき蕎麦の花 同  
臘梅のまだ薫せぬ蕾かな たつの 稲岡 長  
御降もどかと積りて憎まるる 同  
白山に真向ふ太き時雨虹 龍ヶ崎 藤浦昭代  
時雨月去りオリオンに更ける宿 同

落葉踏む音水音へ邸の庭 奈良 宮崎 正  
冬帝の風神忘れ来し日和 同  
莊の辺にましら来る頃炬を開く 神戸 井上浩一郎  
余生とはせざる初霜しかと踏み 同  
老眼鏡額に忘れ日向ぼこ 同 田村 元  
短日や庭の手入の忙しく 同  
冬ぬくし当方少し空元気 渋川 藤森莊吉  
髭も尾も豊かなるかな古狐 同  
初雪の尾根を離るる朝日かな 東京 山根正巳  
青き藁選ぶことより注連作 同  
落蟬の風より軽く拾はるゝ 仙台 竹下陶子  
老いてなほ踊の好きな一詩人 同  
天上に音のなき音 鯛雲 神戸 上崎暮潮  
鯛雲我にかぶさるかぶさり来 同  
炬開や塵なき塵を払ひけり 箕面 長山あや  
寒さてふ気力を奮ひ立たすもの 同  
闘病も今の生き甲斐冬に入る 徳島 嶋田一步  
体力の気力の維持と賀状書く 同